

第二十九回法華經・日蓮聖人・日蓮教団論研究セミナー

私からみた日蓮聖人

大塚耕平

ご紹介をいただきました大塚耕平と申します。三原所長様とのご縁でこの席にお招きをいただきました。

よろしくお願い申し上げます。

レジュメに記しましたプロフィールのとおり、趣味で仏教のコラムや本を書いておりましたら、やがてカルチャーセンターの仏教講座の講師を務めるようになります。いろいろなご縁で今日に至っております。

はじめに、お配りした資料についてご確認願います。

A三の二枚の資料のうちの一枚は、仏教史と仏教伝来図です。皆様にとってはまさしく釈迦に説法の内容で恐縮です(笑)。

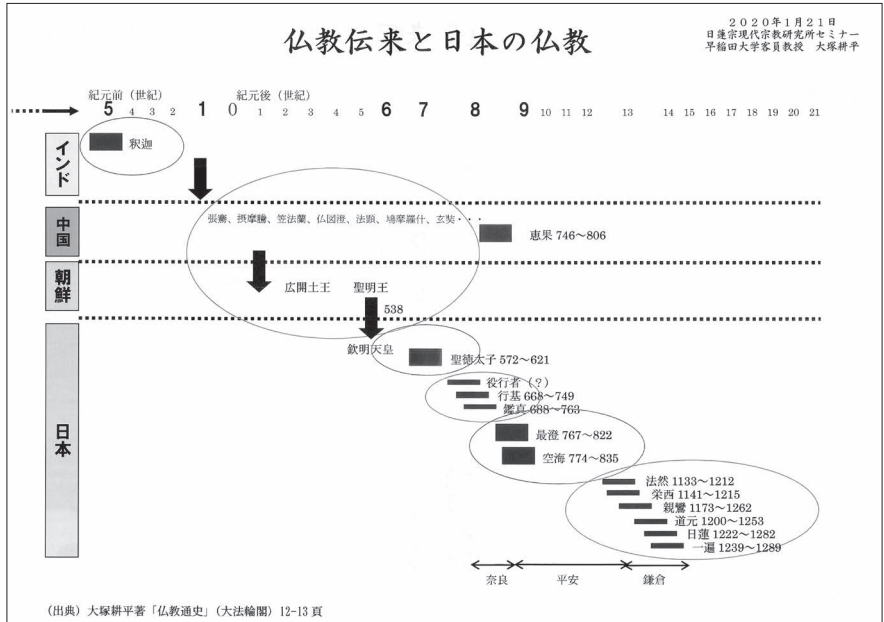
もう一枚は、片面が最澄さんと空海さんのご生涯の

私からみた日蓮聖人

令和2年1月21日
日蓮宗現宗研セミナー
大塚耕平(※)

1. 「仏教を究めて仏になり、恩ある人をも助けんと思う」
(佐渡御勘気鈔)
2. 「我日本の柱とならむ、我日本の眼目とならむ、我日本の大船とならむ」
(開目抄)
3. 「三度国を諫むるに用いずば、山林にまじわれ」
(報恩抄)
4. 「一切衆生の同一の苦は悉くこれ日蓮一人の苦なり」
(諷曉八幡抄)
5. 宗教と政治

(※) 1959年生まれ、愛知県出身。早稲田大学卒、同大学院博士課程修了(学術博士)。早稲田大学客員教授(2005年～)、藤田医科大学客員教授(2016年～)、中央大学大学院客員教授(2005～17年)。日本銀行勤務を経て参議院議員(2001年～)。中日文化センター仏教講座講師(2016年～)。著書に『賢い愚か者』の未来(早稲田大学出版)『仏教通史』(大法輪閣)ほか。



最澄と空海の生涯

天皇		最澄		空海	
767 68 69	称徳 (764~)	767	広野誕生 (近江国)		
770 71 72 73 74	光仁			774	真魚誕生 (讃岐国)
775 76 77 78		779 (12)	出家 (近江国国分寺)		
779 780		780 (13)	得度 (最澄に改名)		
781 82 83	桓武				
784 785 86 87	長岡京遷都	785 (18)	受戒→出奔 (比叡山へ)	789 (15)	長岡京大学入学
788 789 90 91		788 (21)	小堂開創 (のちの延暦寺)	792 (18)	出奔 (行方不明)
792 93					
794 95 96	平安京遷都	797 (30)	内供奉十禪師	797 (23)	受戒 (入唐直前との説もあり)
797 798 99 800		798 (31)	法華経講義	798 (24)	三教指帰執筆
801 802 803 804		801 (34)	法華十講 (高尾山神護寺)		(受戒していないと留学不可)
805		802 (35)	天台講義	803 (29)	遣唐使船難破
		803 (36)	遣唐使船難破	804 (30)	遣唐使船が唐に漂着
		804 (37)	遣唐使船が唐に漂着		12月23日 長安到着
		805 (38)	帰国	805 (31)	5月 惠果和尚に面会 (青龍寺)
					8月 惠果和尚の下で結縁灌頂
					12月15日 惠果和尚入寂
806 07 08	平城	806 (39)	年一度者認定	806 (32)	帰国 大宰府観世音寺に足止め
809 810 811 812 813 14 15	嵯峨	813 (46)	依憑天台宗執筆	809 (35)	入京許可 (高尾山神護寺へ)
816 817 818		817 (50)	徳一論争	810 (36)	嵯峨天皇帰依
819 820 821 822		818 (51)	比叡山大乗戒壇院創設宣言 山家学生式執筆	811 (37)	乙訓寺別当任命
		819 (52)	比叡山大乗戒壇院許可されず 顕戒論執筆	812 (38)	高尾灌頂 (11月と12月)
		820 (53)	6月4日入滅	816 (42)	高野山下賜
823 824 25 26 27	淳和			818 (44)	高野山入開山
828 29				819 (45)	高野山伽藍建設開始
830 831 832				821 (47)	滿濃池修築
				822 (48)	東大寺灌頂道場真言院創設
				823 (49)	東寺下賜
				824 (50)	造東寺別当任命
833 834 835	仁明 (~850)			828 (54)	綜芸種智院創設
				830 (56)	十住心論・秘藏宝鑰執筆
				831 (57)	最澄高弟師事
				832 (58)	万燈会
				835 (61)	3月21日入定

(出典) 中日文化センター仏教講座「仏教の歴史と『生きる』ということ」資料

年表、もう片面は鎌倉六祖のご紹介です。自分で言わな
いと誰も褒めてくれませんので自ら申し上げますが、な
かなかいい資料です（笑）。

最澄さんと空海さんのご生涯を並べ、年代を合わせて
あります。このようにお二人の人生を重ねて見比べる資
料を見たことがなかったので、自分で作りました。

日蓮聖人を含めた鎌倉六祖のご紹介も、六人のご生涯
を横軸で年代を合わせて記しています。六祖師がどの時
期にどのようにお過ごしになられ、ご生涯が年代的にと
のように重なっていたかを比較できるように作ってあ
ります。

カルチャーセンターではこうした資料をもとに、仏教
にご興味をお持ちの受講者にお話しています。皆様のよ
うな僧職の方々ではありませんので、ざっくりお話しす
るにはこの二枚の資料は十分過ぎるほどの内容です。

そのような趣味の活動をしているに過ぎない者が、本
日は三原所長様から荷の重いご依頼をいただきました。
いったい私が何を話し申し上げればいいのかでしょう
かとお尋ねしたところ、日蓮聖人像を深めるセミナーの

Copyrights ©
Kushin Chisaku Office
All Rights Reserved.

鎌倉六祖の生涯

2020年1月21日
日蓮宗現代宗教学研究セミナー
早稲田大学教員教室 大塚耕平

法然	親鸞	宗西	道元
<p>1133 尾作(興山北村) 生まれ 比叡山で修業「智慧第一の法然房」 1175 教善義から阿彌陀仏の真意を覚る 尊修念仏、浄土宗開宗 (象山宮本) 1189 公家や官僧も入門</p> <p>1201 親鸞が歸寧 1204 元弘の法難 1206 興福寺春祭 1207 建永の法難 (源頼朝に流罪) 1211 親見、東山大谷に隠遁 (後の知恩院) 1212 入寂</p> <p style="text-align: center;">75歳</p>	<p>1173 越後(京町) 生まれ 比叡山で修業</p> <p>1201 六角堂百日参籠、法然に歸寧 1207 建永の法難 (越後に流罪) 1211 親見、妻子とともに常陸(流城)へ</p> <p>1224 教行信証を著し、浄土真宗開宗 1234 鎌倉幕府、尊修念仏を禁止 1235 閑居を去り、京都(東山大谷)へ</p> <p>1262 入寂(龜江後の春耕寺へ) 89歳</p>	<p>1141 越中(興山南原) 生まれ 比叡山で修業「持律第一賢上房」 1168 南家に留学(南家で法華宗が栄える) 日本に茶を伝える 1187 春日宮に渡る (虚無僧敵に歸寧) 1191 興福寺復興論を執筆 1200 源頼朝一周忌参籠、身延寺開山 1202 京都に建仁寺建立 1206 東大寺大仏殿再建勸進</p> <p>1214 喫茶養生記を執筆 1215 入寂</p> <p style="text-align: center;">64歳</p>	<p>1200 山城(京町) 生まれ 比叡山で修業</p> <p>1217 建仁寺で明金(智西弟子)に入門</p> <p>1221 <承久の亂> 1223 明金北家に渡る 1225 如浄に入門、身-心脱落して大悟 1227 帰国</p> <p>1243 越前へ、大仏寺(後の永平寺)開創 1253 入寂</p> <p style="text-align: center;">53歳</p>
一遍	日蓮	道元	道元
<p>1239 伊予(松山) 生まれ 1242 大軍府に移り、法然の孫弟子に歸寧</p> <p>1263 還俗して家門を継承 1271 再出家、慈光寺参籠、高野山等を遍拝 1274 <文永の役>時留關東 1279 信州徳久で踊り念仏始まる 1281 <弘安の役>鎌倉浄満満で踊り念仏 1289 入寂(朝石)</p> <p style="text-align: center;">50歳</p>	<p>1222 安房(千葉) 生まれ 元弘流罪寺入山、蓮華寺に歸寧</p> <p>1242 比叡山、高野山等で十年閑修行 1253 安房で日蓮宗開宗 1260 立正安国論執筆、松茸湯法難 1261 伊豆法難(伊豆配流) 1264 小松原法難 1268 籠口法難 1271 依流流罪 1274 <文永の役>親見、身延山に参籠 1281 <弘安の役>身延山久遠寺開創 1282 入寂(池上永徳院、後の池上本門寺)</p> <p style="text-align: center;">60歳</p>	<p>1221 明金北家に渡る 1225 如浄に入門、身-心脱落して大悟 1227 帰国</p> <p>1243 越前へ、大仏寺(後の永平寺)開創 1253 入寂</p> <p style="text-align: center;">53歳</p>	<p>1221 明金北家に渡る 1225 如浄に入門、身-心脱落して大悟 1227 帰国</p> <p>1243 越前へ、大仏寺(後の永平寺)開創 1253 入寂</p> <p style="text-align: center;">53歳</p>

(出典) 中日文化センター仏教講座「仏教の歴史と「生きる」ということ」資料

趣旨に沿って、なぜ日蓮聖人は激しい方だったという印象が強いのか、私なりの考えを自由に申し述べよとのご下命でした。過分のお役目ですが、お言葉に甘え、自分なりの考えを申し述べさせていただきます。しばらくの間、お付き合いください。

そもそも、このような形で本門寺さんとご縁をいただくとは思いませんでした。と申しますのは、国会議員になる前は日銀に勤務しておりましたが、一時期、ここから近い洗足池という所に住んでおり、子供をよく本門寺に連れてきました。境内には鳩がたくさんいます。愚図る子供も鳩と遊ぶとすぐ機嫌が良くなりましたので、頻繁に連れてきていたというわけです。去年も現宗研で講演させていただき、今年もまたお招きいただきました。感謝申し上げますとともに、不思議なご縁を感じております。

子供を遊びに連れてきていた頃の私にとって、本門寺の大きな日蓮聖人の石像を見上げて「これが日蓮聖人かあ」という感想を抱くだけで、十分な知識はありませんでした。

先ほど中尾先生から教科書における日蓮聖人の定版的なイメージのお話がありました。つまり、四箇格言に象徴されるような激しい方であったというイメージですが、私の世代はまさしくそのような定版的な記述のある教科書で教育を受けました。

しかし、率直に申し上げまして、仏教に興味がなければ、日蓮聖人のそうした定版的なイメージも記憶には残っていません。一般の高校生や大学生が長じて大人になってからそういう印象を持ち続けているかという点、必ずしもそうではないと思います。

カルチャーセンターでは、鎌倉六祖について、法然さんから始まり、親鸞、一遍、栄西、道元の各祖師に続いて日蓮聖人のお話をさせていただいておりますが、受講者の皆さんが日蓮聖人に対して定版的なイメージや、何か悪い印象を持っているかという点、必ずしもそうではないと思います。

高校生や大学生が教科書における日蓮聖人の印象をとくに引きずっていないのと同様に、大半の方々には日蓮聖人の定番的なイメージが深くインプットされているわけではありません。

だからこそ、日蓮聖人がどういう方であったかということは、宗派の皆様方のご説明の仕方や今後のさまざまなお活動の結果として、十分変わっていく、あるいは形づくることのできるのではないかと、個人的には思っております。そうは言いつつ、本日のセミナーの問題意識に照らし、あえて日蓮聖人が少々激しい方だったという印象を一般の人々が持っているとは仮定すれば、その理由は三つぐらいのポイントかと思えます。

三つのポイントを申し上げる前提として、レジユメに沿って少し前置きの話をさせていただきます。

日蓮聖人はご真蹟を含め、たくさんの方の文献を遺されている宗祖です。私は仕事柄、気分が滅入ることも多いのですが（笑）、仏教の本を読むと気持ちが安らぎます。いろいろ読ませていただいている中で、例えば、レジユメにまとめました「佐渡御勘気鈔」「開目抄」「報恩抄」「諫暁八幡抄」に登場する四つのお言葉などは、日蓮聖人の前半生と後半生を考える上で印象深く受け止めています。

佐渡御勘気鈔には「仏教を究めて仏になり、恩ある人をも助けんと思う」と記されています。開目抄のお言葉は凄いですよね。「我日本の柱とならむ、我日本の眼目とならむ、我日本の大船とならむ」の述べ、まさしく自分が日本を救う決意を示しています。わが身を捨てて人々を救おうという御覚悟ですから、前半生の迫力が伝わってきます。しかし、幕府への諫言は受け入れられず、むしろさまざま法難に遭い、報恩抄では「三度国を諫むるに用いずば、山林にまじわれ」と言い放ち、その後は諫暁八幡抄で「一切衆生の同一の苦は悉くこれ日蓮一人の苦なり」とおっしゃっています。

実は一週間前にも愛知県の本遠寺にお招きいただき、お話をさせていただきました。その際、本日もご臨席の石黒ご住職から「佐前佐後」という言葉を教えていただきました。

仏教趣味人のひとりとして、佐渡に流される前と後で日蓮聖人の印象がずいぶん違うと感じていましたが、そもそも「佐前佐後」という言葉があり、宗派的にも佐渡流罪が日蓮聖人のご生涯の節目として受け止められていることを知りました。

私は政治に携わらせていただいております。ご聖人のお気持ちがよく分かったら畏れ多いことですが、先ほどご紹介したいくつかのお言葉や「佐前佐後」という言い方から、感じるところがございます。

多くの人々を幸せにしたい。しかし、全員を幸せにする、満足させることは、実際には難しいことです。政治に携わらせていただきながら、日々思い悩んでいます。人々を幸せにするどころか、たった一つのことを決めるにしても、関係者全員が納得する、満足することはなかなか難しい。毎日その現実には晒され、悩んでいます。そうした立場から、かつ仏教趣味人として日蓮聖人のご生涯を考えさせていただくと、「なるほどなあ」と思うところが多々ございます。

「佐前佐後」という言葉を知って、本当に腑に落ちました。誤解を恐れずに申し上げれば、日蓮聖人の前半生は、結果的に政治家としてご活動されたという印象です。後半生はまさしく宗教人として、人々の心を安寧に導くためのご活動に注力されたのだと思う次第です。

冒頭にお示しした仏教史の資料をご覧ください。六つの楯田が記してありますが、これらは『仏教通史』という拙著の章立てと連動しています。つまり、私なりの仏教史の区切りは、第一がお釈迦様のご生涯、第二が日本への仏教伝来、第三が聖徳太子による仏教に基づく国づくり、第四が異国の宗教であった仏教が日本化、如法化していく過程で大きな役割を果たされた役行者、行基さん、鑑真さんの時代です。

先ほど、高橋先生が南都六宗のお話をされました。日本仏教は南都六宗の荒廃に直面し、道鏡事件まで起きてしまいます。そうした時代の中で、「人々の苦しみを放置していいのか、仏教はこれでいいのか」という疑問を抱いた最澄さん、空海さんが登場し、日本仏教の基盤を作りました。これが第五です。

しかし、平安時代末期になると、再び世相は荒廃します。天皇、上皇、藤原氏、北条氏、平氏、源氏など、権力者が争いごとに終始し、人々は苦しみます。その窮状の中から、人々を救うために鎌倉六祖が登場し、今日の主な宗派につながっていきます。

カルチャーセンターではざっくりとこうした仏教史をお話ししていますが、鎌倉六祖のご生涯を並べたのがもう一枚の資料です。最澄さんと空海さんのご生涯の資料の裏面をご覧ください。

鎌倉六祖を比較してみると、日蓮聖人以外の五祖師は公家や武士の家の生まれです。日蓮聖人は、安房小湊の漁師の家に生まれたと伝わります。実は天皇のご落胤だったという異説もありますが、通説では小湊の漁師の息子さんです。

この出自の違いが、日蓮聖人と他の五祖師の大きな違いを生み出しているように思います。

つまり、日蓮聖人は庶民に生まれました。人々の苦しみを理解し、共有しています。なぜ他宗を批判したのか。それは、人々を来世ではなく、現世で救おうとしたからではないでしょうか。死んでから救われても意味がない、目の前で困っている人々を救うためには、具体的な行動に移さなければならぬとお考えになったのではないのでしょうか。念仏を唱えれば誰もが救われると言っても、現に今苦しんでいることを解決できるわけではない。そう感じた結果が、他宗への厳しい姿勢につながったのではないのでしょうか。

それはまさしく、現代で言えば政治家の仕事です。もちろん、政治家に限る必要はなく、官僚も含め、社会や国に関わりのある仕事をしている者全てであり、企業経営者などの財界人や学者、宗教者、各界の指導者全ての使命です。しかし、その中でも政治家が最も重い責任を負っていることは言うまでもありません。日蓮聖人は、ただ祈るばかりでなく、自ら人々の苦しみを解決しようとし、幕府に諫言してそれを果たそうとした。まるで政治家のように活動されたのが前半生であったのではないのでしょうか。

現代においても、たとえ良い法律を作っても、仮に総理大臣を何年やっても、多くの人々を救うことはなかなかできない。全員が気持ちよく、快く、幸せになれるなどということは、なかなか難しい。できる限り大勢の人々に心の安寧をもたらすためにはどうしたらいいのか。結局、政治よりも、心の安寧を導く仏教の役割は極めて大きく、そのことに軸足を置いて仏教本来の活動に力を注いだのが日蓮聖人の後半生ではなかったのでしょうか。私自身、実際にそのように感じるがあります。

もう一度レジュメをご覧ください。前半生は「我日本の柱とならむ」と言っているわけですから、これは大変な御覚悟です。他宗を批判してでも現世を良くしたいという思いから日蓮聖人の激しい言動になったものと拝察しますが、それは必ずしも責められるべきことではなく、そういう決断をした、そういう道を歩まれたということに尽きます。

しかし、日蓮聖人がいかに素晴らしい決断をしたとしても、世の中全体が、あるいは幕府が、日蓮聖人の諫言や、日蓮聖人の決断や主張に賛同するかというと、そうではありませんでした。現代よりもはるかに難しい時代です。とうとう「三度国を諫むるに用いずば、山林にまじわれ」と言って、その道を断念する。その後は、人々の苦しみを具体的に解決するよりも、人々の苦しみを一緒に感じよう、人々に寄り添おうという仏教本来の境地に一層近づかれたのではないのでしょうか。仏教趣味人としては、そのように受け止めております。

以上のような認識を前提に、残された時間で、このセミナーの問題意識、すなわち日蓮聖人が他宗に厳しく当たり、激しい人物であったという受け取られ方、表現のされ方がなされているとすれば、それはなぜかということ、あるいはそれを変えていくとすればどうすればよいのかということについて、私なりに感じている三つのポイントを申し上げます。

一つは、説明の仕方です。例えば、本日私が申し上げましたような認識を、多くの関係者の皆さんがそれを共有できるのであれば、そういう説明の仕方をしっかり行っていくことが、固定的なイメージの変化につながると思います。

二点目は、戦前政府の国威発揚の取り組みと日蓮聖人の関係です。もう少し詳しい研究、確認が必要ではあるものの、戦前政府の対応が日蓮聖人の印象に影響を与えているということですが。

すなわち、日蓮聖人が蒙古襲来を祈りによって撃退したということが、ご霊験あるいは神風美談として利用されたためです。映画も制作されました。結局戦争に負け、戦後となり、戦前の全てを否定するという社会的な大回転や風潮は、教科書の表記や検定に関わる学者、教育者、官僚等の深層心理や議論に影響したのではないのでしょうか。つまり、戦前は肯定的に捉えられていた日蓮聖人を否定的に解釈するという潜在意識、深層心理です。

戦前の軍人では、石原莞爾や東郷平八郎など、こういう方々は日蓮聖人の信者でありましたし、田中智学なども日蓮聖人を讃える方向で様々な活動をしたと聞いています。そうした戦前を全否定するという過程の中で、教科書の記述にも何かの影響が生じたのかもしれませんが、あくまで個人的な感想ですが、これが二点目です。

三点目は、日蓮聖人の実像、実際のご性格も影響しているのかもしれませんが、しかし、これは誰も確認できません。一点目と関係しますが、説明の仕方、理解の仕方如何です。仮に実際にそのような人物であったとしても、なぜ激しい言動になったかという理由、背景を丁寧に説明することで、固定的、先入観的イメージは変えられるのではないのでしょうか。遺された多くのご真蹟や文献の研究、分析から、固定的人物像とは異なる側面を丁寧に発掘し、広めていく必要があります。

私なりの仏教史の六区分に照らすと、日蓮聖人は、仏教の日本化、如法化の過程で人々の救済に邁進した行基さんに近い役割を果たそうとされたのではないかと感じています。

行基さんも前半生は権力から敵視されたのですが、晩年は東大寺大仏勧進聖、大僧正に任じられました。最終的にそうなられたので、行基さんの今日のご評価があります。日蓮聖人の場合、晩年も時の権力に認められた状況下で入寂されたわけではありません。行基さんの時代と単純な比較はできませんが、そんな違いもあるのかなと感じており

ます。

本日は、三原所長様から「自由に何を話してもいい」というお許しでしたので、「私から見た日蓮聖人」ということで、畏れ多くも率直かつ勝手なことを申し述べさせていただきました。

日蓮聖人のご生涯だけからはなかなか見えない部分も、仏教史全体の中での時代背景、鎌倉六祖の中での日蓮聖人の出自や、その当時の世相などを考えると、色々な理解の仕方、説明の仕方ができると思っています。

歴史の評価や内容は時代とともに変わります。私の地元は名古屋であり、江戸時代は尾張藩でした。幕末の尾張徳川家の動向、すなわち平和裏に明治維新を迎えるために尾張藩がどのような苦難をあえて受け入れたかということはほとんど知られていません。語られることもありません。大河ドラマでもいつも取り上げられません。今日は詳しくお話しする時間はありませんが、その理由は、明治政府関係者がその歴史を封印してしまったからです。それと同様に、例えば日蓮聖人のご生涯も、固定的な歴史観から形成されています。本日が申し上げたような観点から、過去の作品とは異なる視点で日蓮聖人の映画や伝記が作られれば、その人物像も変わってくるのではないのでしょうか。

現宗研の皆様的那种なお取り組みに期待しつつ、ちょうど時間となりましたので、私の拙い話を終えさせていただきます。ご清聴、ありがとうございました。

司会 大塚先生、どうもありがとうございました。